

タイトル：2019年度 教育セミナー（第15回）

日時：2019年9月19日（木）～22日（日）

場所：東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所 3階大会議室（303）

「アラブ移民と聖者信仰の伝播：南アラビアとジャワの事例から」

新井 和広（慶應義塾大学）

本講義では、南アラビアのハドラマウト地方とジャワの聖者信仰の関係を、移民と血統から読み解いた。ハドラマウトとジャワは距離としては遠く離れているが、双方ともインド洋海域に属した地域であること、住民の多数がムスリムであること、インド洋沿岸地域では特に聖者信仰が盛んな地域であること等共通点も多い。ハドラマウトからジャワに移民した宗教者の中で死後聖者とみなされ、墓の上に廟が建てられた人物も複数いる。また最近ではジャワからハドラマウトへイスラーム諸学を学びに行く留学生、ハドラマウトからジャワへダアワ（イスラームへの呼びかけ）を行うために訪れる宗教者もあり、宗教活動を通じた人の交流が盛んになっている。それに従って、ハドラマウトにおける聖者信仰もジャワで知られるようになり、ジャワではハドラマウト帰りの元留学生が「聖者（ワリー）の地」としてハドラマウトを宣伝している。

ジャワにいるアラブ系（ほとんどがハドラマウト出身者の子孫）や現在ハドラマウトからジャワを訪れている宗教者のうち預言者一族（サイイド）は、東南アジア、特にジャワのイスラーム化を彼らの祖先の功績だと考えている。そして様々な機会に自らの歴史観を宣伝している。東南アジアのイスラーム化の過程は史料が乏しいこともあり、実証的なアプローチで研究することは不可能だと言ってよい。このためハドラマウト出身者によるイスラーム化という物語も、各地に伝えられている伝説の中に居場所を得る可能性がある。その際に彼らが使用しているツールは血統である。

たとえば、ハドラマウト出身サイイドたちはジャワのイスラーム化に多大な貢献をしたと考えられている九聖人、ワリ・ソンゴを、ハドラマウト出身サイイドの系図に組み込んでいる。こうすることで現地の伝説と自分たちの歴史観を対立させることなく同居させている。ワリ・ソンゴの子孫たちも系図を保持しているが、そこでの主な関心は誰がワリ・ソンゴの子孫かという点である。一方、サイイドたちはワリ・ソンゴの子孫にはほとんど興味を示さず、ワリ・ソンゴ自身が誰の子孫なのかに関心を払っている。よって、系図の上でもワリ・ソンゴ側とサイイド側が正面衝突することはない。ここで見えてくるのは血統意識の柔軟性である。血統をもとに（血統を操作して）歴史を捉え直すことで、地域、文化、民族的な性質を超えて自分と他者をつなげることができる（それが史実かどうかは別の問題ではあるが）。

ハドラマウト出身者は東南アジア各地に移民する際に、それぞれの定住先で経済的にも社会的にもニッチを見つけることに長けているが、歴史認識においてもその能力が反映されていると言える。